

白鳥の研究と国際交流

日本白鳥の会会長 松 井 繁

日本野鳥の会，山階鳥類研究所，東海大学海洋学部，NTTなどが小型発信機を開発した。本年4月10日，北海道浜頓別町のクッチャロ湖で，わが会の山内昇氏が協力して，これを4羽のコハクチョウの背中に装着し，フランスの人工衛星アルゴスが受信し，コハクチョウの渡りのルート解明を行った。当初電池の寿命は約2ヶ月の予定であったが，寒冷地を通過するためか，1ヶ月で電池の寿命がきて受信不能になった。けれどもこのうちの1羽が繁殖地のコリマ川河口に到着した。またどこにも寄らずに日本海を縦断しアムール川河口付近に到着した1羽がいた。

南サハリン狩猟経営局の専門員ドリコフ氏は，天気の良い日に間宮海峡から日本海をまっすぐ南下する群れのあることを，私に教示してくれた。今回のアルゴスによる追跡調査はハクチョウの北上の時であるが近い将来，ソ連で発信機を装着し，ソ連の人工衛星で追跡し，南下のルートを解明する時がくるであろう。

昨年12月にイギリスのオックスフォードで行われた，第3回国際ハクチョウシンポジウムには，各国の研究者と共にソ連の学者が多数参加し研究発表をしていた。その中でオスタペンコ氏がサハリンでのハクチョウの渡りについて講演された。この原稿を氏の好意で本号に掲載することができた。

来年1月には別掲のように，以前，総会の折に話をしていただいたことのあるコンドラチェフ氏が来日し，新潟県，福島県，宮城県，札幌市で講演をしていただく予定である。

このようにハクチョウの研究についても国際交流が盛んになってきている。この潮流に乗り遅れないようにするためには，地味な調査，研究の積み重ねが大切であると，私は確信している。